



夏になると、科学文化センターにはいろいろな虫の質問がきますが、特に多いのが「カブトムシの飼い方」です。そこで、今回は簡単にカブトムシの飼い方を紹介しましょう。

今の時期カブトムシはそろそろ成虫になるころです。成虫の期間は6月から9月で、交尾産卵こうびさんらんの後、秋には死んでしまいます。最近カブトムシはペットショップで買ってくるのが多くなりました。しかし、以前に比べ大変少なくなりましたが、近くの林や果樹園、はたまた、ダム湖や山手の公園の灯火の下などをさがすと、まだ見つかります。

成虫の飼い方

まず、縦・横・高さが30センチ×40センチ×30センチほどの飼育箱しいくぼこ（金魚などを飼うプラスチック水そうでよい）を準備し、底に土を10センチと腐葉土ふようど（ペットショップで昆虫マットなどの名前で売られているものでもよい）を10センチほどの深さに入れ、カブトムシがつかまれるほどの太さの木の枝を入れます。成虫せいちゅうのえさは、リンゴ、スイカなどの果物、蜂蜜はちみつを2～3倍にうすめたもの、もしくはペットショップで売っているカブトムシやクワガタ用のゼリーを準備します。

できればオスとメスをいっしょに入れておきます。そうすると交尾産卵こうちゆうし幼虫ようちゅうの飼育もできます。しかし、あまりたくさんはいっしょにしないほうがよく、4～5頭ぐらいまでにします。えさは毎日取りかえ食べ残しをそうじします。土が乾かないように霧吹きなどで湿しめらせます。直射日光には当たらないところに置いておきます。交尾が見られたなら、メスは土中に卵を産みます。産卵は8月ごろで、数十卵を産みます。成虫せいちゅうの寿命じゅみょうはあんがい短く2ヶ月ほどです。

野外では、カブトムシのメスは、かれた木の下や腐葉土ふようどや堆肥たいひ、おがくずをつんだ中に産卵します。乳白色の丸い卵（直径4mm程度）からは10日から15日くらいで幼虫ようちゅう（10mm弱）が出てきます。幼虫は腐葉土ふようどやかれ木をエサとします。ふ化後10日後ほどで1回目の脱皮だっぴをして2令幼虫れいようちゅう（20mmほど）になります。

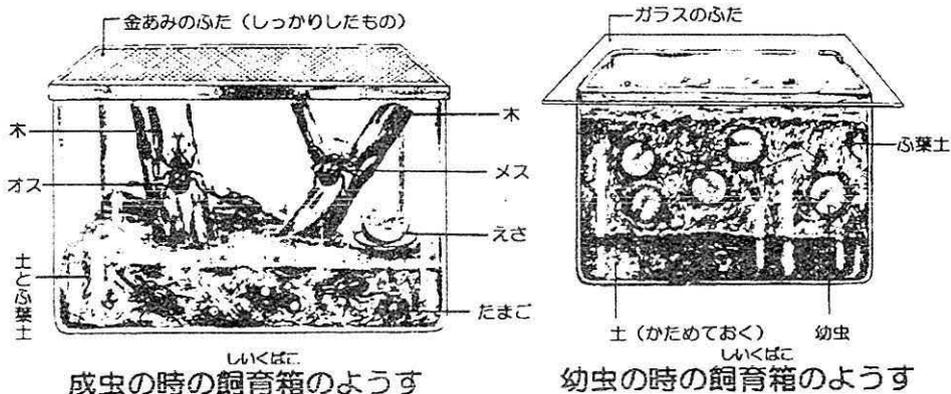
幼虫の飼い方

夏休みが終わるころ、一度飼育箱の腐葉土ふようどや土を取り出してみましよう。おそらく小さな幼虫が見つかると思いますが、そのまま元にもどしてやりましよう。カブトムシの成虫が死んでしまったなら、死んだものは取り出し、飼育箱に腐葉土ふようどやかれ木をたくさん入れてやりましよう。そして乾燥かんそうさせないように注意します。幼虫の数はあまり多くしないように、せいぜい10匹くらいにしておきましよう。幼虫のえさには、シイタケのなる木がかれたものやエノキなどの栽培さいばいに使用した使用済みのおがくずも良いものです。

10月ころ幼虫は2回目の脱皮をして、大きくなり3令幼虫れいようちゆう(70mmくらい)で冬をこします。フンが多くなったら腐葉土ふようどを取りかえてやりましよう。冬の間は、玄関などの日の当たらない、温度の上がない所に置いておくとほとんどエサも食べません。

春になってあたたかくなると、またエサを食べ始めます。幼虫も時々ならほり出して、手でさわっても大丈夫だいじょうぶです。時に黒くなって死んでいることもあるので死がいは取りのぞきます。5月になると10cmぐらいになり、6月にはサナギになります。この時はさわらないようにしましよう。幼虫は深くもぐり、まわりの土を押し固めて部屋を作り、作り終えてから1週間ほどで皮をぬぎ、サナギになり、その後3週間ほどで成虫になり外に出てきます。

カブトムシはたいへん飼いやすい昆虫です。成虫の体はたいへん丈夫で力も強く、子ども達のよい遊び相手になりますし、産卵から幼虫の飼育、そして成虫までにそだてるのも特にむずかしいところはありません。ことしは、カブトムシの飼育に挑戦してみましよう。(根来 尚)



富山市科学文化センター

〒939-8084 富山市西中野町1-8-31 (TEL. 076-491-2123)

<http://www.tsm.toyama.toyama.jp>